

『筑波哲学』第24号（2016年）

ベルクソンの時間意識論

『意識の直接与件についての試論』から『物質と記憶』へ

岡嶋 隆佑

ウィリアム・ジェイムズ『心理学原理』（1890, 以下 PP と略記）が「精神そのものの変化が継起的であることと、その継起を知ることとの間には […] 大きな隔たりがある」と述べ、継起の経験は、経験の継起に対し、「それ自体で特別な解明が必要な」「付加的な事実」である（PP, 628-629）、と強調したことは良く知られているだろう。前年出版のベルクソン『意識の直接与件についての試論』（1889, DI）には、継起の経験について、PP とほぼ同じ二つの説明方針を見出すことができるが、いずれも十全な説明とは言い難い。ベルクソンにおいて時間意識が明確に理論化可能となるには、『物質と記憶』（MM, 1896）を待たねばならなかったのである。だがその MM は、DI の困難を除去しつつ、PP が前提とし問題化しなかった経験の継起にまで明確な説明を与えている——以上を示しつつ、DI から MM までのベルクソンの時間意識論を可能な限り明確化すること、これが本稿の目的である。

具体的な議論の構成を示しておこう。DI と PP に共通する上述の二つの説明方針は、現代の時間意識論における主要な二つの立場——延長説（Extensionalism）と把持説（Retentionalism）——にほぼ対応するものである。そこで、メロディーの経験を具体例として両説の骨子を提示し、各々の利点と困難を明示する（以上、第一節）。その上で、具体的なモデルを用いて、MM の時間意識論を、延長と把持、両説の利点を取りこみかつ困難を除去するものとして提示する（第二節）。最後に、MM においては、時間意識に対する行動という観点の導入によって経験の継起が説明可能となることを明らかにする（第三節）。

1 時間意識についての二つの説明：延長説と把持説

DI の引用から始めよう。以下の思考実験についてベルクソンは、ジェイムズに宛てて、自らの「哲学の方向性を決定付けたもので、以降私が成すことができたすべての省察と結び付いています」（M, 766）と書いている。

「…」デカルトの悪しき霊よりも強力な悪しき霊が、宇宙の全運動に対して二倍の速度で進むよう命令したと想定してみよう。その場合、天体現象には、あるいは少なくとも天体現象の予見を可能にする方程式には、いかなる変化もないだろう。というのも、こうした方程式において象徴 t が指示するのは持続ではなく「…」結局はいくつかの同時性であるからだ。こうした同時性や合致は「宇宙の加速以後も」依然として同じ数だけ産出されるだろう。ただ、それらを分つ間隔 (intervalle) だけが減少したことになるが、このような間隔は計算とは何の関わりももたない。しかるに、これらの間隔こそまさに生きられる持続なのであり、意識が知覚するところの持続なのだ (DI, 145)。

実験の解釈は措こう。目下重要なのは、ベルクソンが最初期から時間意識に延長を認めていたという事実である。いま二つの時点 t_1 と t_2 (二つの「同時性」) を例とすると、DI はこれらの間で意識される間隔を、明確に持続と呼んでいる。こうした観点からすると、ベルクソンの持続は、文字通り、「時間の大きさ (grandeur du temps)」なのである¹。

翌年出版の PP も、「時間の知覚」について、およそ同じ路線をとっているように思われる²。というのもそこでジェイムズは、経験不可能な「客観的現在」を「厳密な現在 (strict present)」と呼び、これと対比される「主観的現在」としての「見かけの現在 (specious present)」に、明確に時間的延長を認めているからだ。

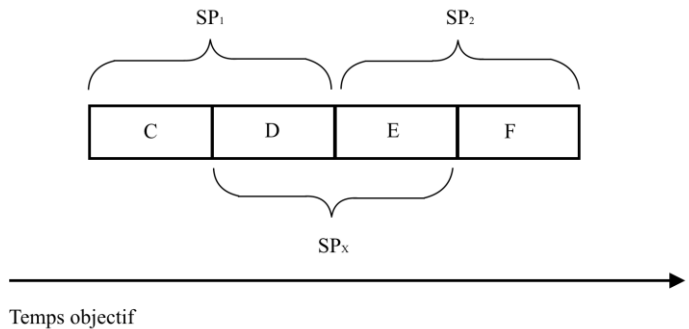
われわれの時間知覚の構成単位 (unit) は、船首と船尾、すなわち前方を見る端と後方を見る端をもつ一つの「持続 (duration)」である。その一方の端から他方の端への「継起」の関係が知覚されるのは、この持続ブロック (duration-block) の諸部分としてのみである。われわれはまず一方の端を感じ、次いで、その後で他方の端を感じ、その継起の知覚から間にある時間の間隔を推論するのではなく、時間の間隔を全体として、その全体に埋め込まれた二つの端と共に、感じているように思われる (PP, 610)。

¹ ベルクソン哲学には、空間的な数や大きさ、長さや単位等と区別される、持続的な数や大きさ、長さ、単位等が存在するという Miravète[2011, 2012]の主張を本稿は前提としている。

² もちろん DI が PP に影響を与えたというわけではない。「意識の流れ」というテーマについてのより歴史的な考察としては、Girel[2012]が詳しい。またジェイムズの「見かけの現在」の諸解釈については、Dainton[2014] (The Specious Present: Further Issues, sec. 3) を参照されたい。

この一節は、現代の時間意識論における「延長説」の典型として引かれるものである。そこでバリー・デントンの分析に従って、四つの音の継起 C-D-E-F (以下ハイフンで継起を示す) を例に、継起の経験に具体的な説明を与えてみたい (fig. 1)。延長

fig. 1



説は、見かけの現在がそれ自体、時間的な延長 (extension) をもつことを認めるため、非常に自然かつ直接的な仕方では、継起の経験を説明することができる。例えば、C-D を内容とするひとつの見かけの現在 SP₁ において、C と D は一緒に、かつ継起的に経験される。それゆえ、見かけの現在の内部においてその構成要素は連続的である。見かけの現在同士の接続についてはどうだろうか。SP₁ と (E-F を内容とする) SP₂ だけを問題とする限り、その接続 (D と E) は連続的でないように思われる。しかし見かけの現在の構成要素に重複 (overlap) を認めるのであれば、事情は異なる (cf. PP, 606)。すなわち、両者の間に、D-E を内容にもつ SP_x を設ければ、C-D-E-F は連続的な継起の経験となる。ただしこれは、最初からあった C から F に対して新たに経験を付け加えるということではない。デントンによれば、D タイプの経験は、SP₁ と SP_x の双方に見出されるが、これらにおいて、二つの D トークンが存在するわけではない。そうではなく、「複数の見かけの現在はそれらの共通の部分共有し、重複することができる」(以上、Dainton[2014], 5-5) ののである。このように延長説は、経験の連続性に対して明確な説明を与えることができるということをその最大の利点としている。

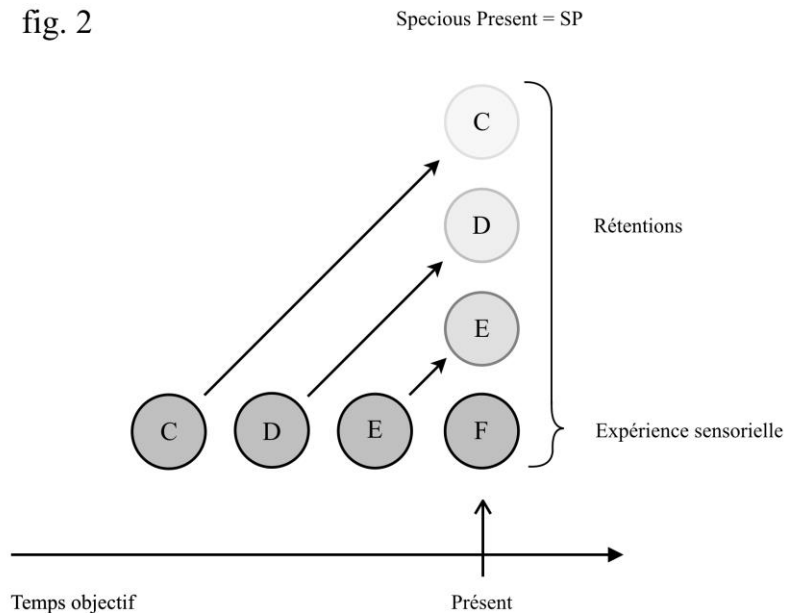
主観的な時間だけを問題とする限り、継起の経験についての延長説は非常に説得的と言えるだろう。しかし、この説明には、主観的な時間と客観的な時間 (見かけの現在と厳密な現在) の対応を考慮すると次のような困難があるように思われる。fig.1 に明示されているとおり、延長説は通常、見かけの現在が、異なる時点で生起する相互に識別可能な二つ以上の要素を含むと主張する。例えば、D が客観的に現在であるとき、すでに過去である C までもが、一つの同じ主観的現在 (SP₁) に含まれ、その内で C から D への継起が経験される、と言うわけである。だが、C と D とが等しく現在として経験されるのなら、SP₁ において継起が経験されることはないだろう。というのも、これら二つの音は、同時に生起

する場合と同様に、和音として聞こえるだろうから³。経験の連続性に対する上述の説明は、時間的に離れた複数の要素が継起的に経験されるという前提からの直接的な帰結であるが、延長説はその前提そのものが、自明でも直観的でもないのである。

このような困難を解消するために、見かけの現在に時間的延長を認めず、その構成要素に時間様相 (temporal modes) を設けるのが、「把持説」と呼ばれる立場である。PP にはこの立場を示唆する記述も見出すことができる。

もしここでわれわれの意識の実際の時間の流れを水平線で表せば、流れの思考、あるいはその過去、現在、来るべき断片の思考は、この水平線上のある一点に立てられた垂直線として描かれる。この垂直線の長さはある対象、あるいは内容を表すので、この場合にはこの流れの垂直線の立っている実際の瞬間における時間の、それもその全てと一緒に思考される時間の思考である (PP, 629)。

把持説の観点から、先と同じ継起の経験を図示したものが fig. 2⁴である(議論を簡単にするため、未来様相については省略する)。F が客観的に現在であるとき、把持的な見かけの現在は、感覚経験としての F に加え、把持としての C、D、E の計四つの要素から構成される。



³ 少なくともデントンの提示する延長説において、見かけの現在の構成要素は、全て同程度の現在性をもっているように思われる (cf. Dainton[2014], 6-2)。また、Le Poidevin[2007] (pp. 87-88) は、視覚経験について同型の批判を展開している。

⁴ Dainton[2014]の図を本稿の議論に沿って書き換えたもの。

ここで把持とは、過去の感覚経験を現在まで保持する働きであり、過去の出来事の想起にかかわる「二次記憶」と、「残像」(PP, 635)の形成などを行う「一次記憶」というジェイムズの区分の内、後者が担うものである(PP, 630)。この働きによって、把持説は、見かけの現在の各要素に——Fは完全に現在、Eはたった今、Dはより過去、Cはさらに過去といったように——時間的様相の差異を設け、それらの同時的经验によって継起の経験を説明する。時間的に離れた複数の要素が一緒に経験されると主張する延長説に対し、同時に存在する要素だけが統一的に経験されるという前提⁵から議論を始める把持説は、継起の経験への非常に直観的な説明方針だと言えるだろう。

さて、以下の一節における保持の働きを、ジェイムズの一次記憶の意味で理解するなら、ベルクソンによる持続の定義は、把持説によっても解釈可能であるように思われる⁶。

まったく純粋な持続とは、われわれの自我が黙々と生きるだけで、現在の状態と先行する諸状態とのあいだに分離を設けるのを差し控える場合に、われわれの意識的諸状態の継起がまとう形態である。そのためには […] これらの状態を保持しつつも (*en se rappelant*)、点と点のようにそれらを現実的状态 (*l'état actuel*) と併置するのではなく、あるメロディーに属する複数の音をいわばひとつに融合したものとして保持する場合のように、現実的状态とそれに先立つ諸状態を有機的に組織化すれば十分である (DI, 74-75)。

一方で、把持説を採ると、見かけの現在同士の連続性を確保することが難しくなる。これは、時間的延長という概念を拒否し、経験の対象を同時的な要素だけに限定することからの当然の帰結である。

したがって、把持か延長か、という二者択一は、結局のところ、直観をとって連続性を放棄するか、連続性をとって直観を放棄するかというジレンマに陥ってしまうように思われる。

⁵ いわゆる「同時気づき原理」(PSA) (cf. Dainton[2014], sec. 3)。把持説の代表的な論者（カント、ブレントラーノ、フッサール、後期ブロード）が提示するモデルについては、Dainton[2014] (sec. 6) を参照されたい。また把持説は通常、経験の内容と気づき（あるいは対象と作用）を分離するが、本稿が扱うジェイムズとベルクソンは、この分離を前提としていない（あるいは少なくとも、第一義的なものとして考えてはない）。内容と気づきの同一性についての論証は Dainton[2000] (7-1) を参照。

⁶ すでに何度も指摘されてきたことであるが、典型的には Deleuze[1968] (p. 99)。

2 時間意識論への MM の位置づけ

PP における「見かけの現在」は、現代の時間意識論における延長説と把持説、双方の立場から解釈が可能であり、DI にもちょうど両者を示唆する記述があることを確認したが、これら二つの著作には直接的な影響関係を見出すことができない。しかし続く MM は、明らかに PP の時間意識論の影響下にある⁷。というのも、その第三章前半 (MM, 152-153) では、「数学的現在」と「私の現在 (mon présent)」⁸という、PP の「厳密な現在」と「見かけの現在」に対応するような区別が提示されるからである⁹。残念ながらこの箇所では具体例は与えられていないので、引き続きメロディーの経験をベースに、MM の時間意識論を検討していこう。

問題となるのは記憶概念である。確認したとおり、DI は、すでに持続において先行する状態の記憶 (souvenir) (DI, 78-79) を保持する働きを見出していた。そしてその働きが明確に理論化されるのが MM だからである。ただし目下重要なのは、その第二章で提示される有名な習慣とイメージの区別ではなく、同第一章で設けられる記憶の形式についての機能的な区別である。

知覚は、実際、どんなに短いものを想定しようとも、つねに一定の持続を占め、したがって、多数の瞬間を相互に延長する (prolonge) 記憶の働きを必要とする。のみならず、後ほど明らかにしようと思うが、感覚的性質の主観性は、とりわけ、われわれの記憶の働きによる実在の一種の収縮からなっている。要するに記憶は、〔A〕直接的知覚の土台 (fond) を記憶の布 (nappe de souvenirs) でおおおう限りにおいて、同時にまた〔B〕多数の瞬間を収縮する (contracte) 限りにおいて、この二つの形式のもとで、知覚における個別的意識の主要因、すなわち事物についての私たちの認識の主観的側面を構成する (MM, 30-31)。

⁷ 議論内容の類似はもちろんのこと、ボアロー＝デプレオーからの同一の引用、エクスネルの同一の実験の参照などからも明らかである。

⁸ 本稿は(一つの)「私の現在」を、持続的な「単一の直観」(MM, 76, 246, 256)や「単一の瞬間」(MM, 232)などと同一視し、その時間的延長を一定不変と見做している。後の「変化の知覚」(PM, 168-169)は「私の現在」の時間的延長に、「生への注意」の程度と連動した変化を認めているが、そこで問題となっているのは収縮でなく現実化としての記憶の働きである。二つの働きをドゥルーズや平井[2010]のように一元的に読む解釈方針への対応は、紙幅の都合から別の機会に譲る。なお『創造的進化』(EC, 278)で「私の現在」は MM とほぼ同じ意味で用いられている。

⁹ 後で見るとおり、「見かけの現在」と「私の現在」は同じものではない。というのも、まずもって後者は前者よりも圧倒的に短い時間的延長しかもたないからである。

先にみた DI における保持の働きは、MM では引用部の A に対応し、同書の第二、第三章の全体を通じて詳述されるものである。ここで、ベルクソンの純粹記憶理論から、続く議論に最低限必要な論点を取り出しておこう。(1) まず、記憶の「完全な残存」(MM, 166-167) について。私たちが経験する出来事は、それらが生起したその瞬間からすべて自動的に保存される。重要なのは、記憶は脳とは独立にそれ自体で保存される、という点である（この意味での記憶が、純粹記憶と呼ばれる）。(2) 次いで、出来事の継起の「順序」(MM, 89-90) の保存について。ベルクソンは記憶が「日付け (date)」をもつことをたびたび強調している。(3) 最後に、記憶の「現実化」(cf. MM, 157) について。保存されている全記憶の内、目下の行動にとって有用なものは感覚に投射されてイメージと化することができる（そこで A を以下、「現実化」の働きと呼ぶ）。

こうした理論の下で fig. 2 を MM の観点と対応付けてみよう。現在の感覚経験が F であるとすれば、その左にある諸要素 (E、D、C) はすべて、かつての感覚経験の純粹記憶である。これらが F へと投射され現実化される——こうして、F の上部に位置付けられる把持に相当するものが得られる——と、C-D-E-F の継起が経験される（というのも、これらの記憶は生起した順序を保存しているから）。このような理解をとるとき、MM の時間意識論は把持説に近づくと言えるだろう¹⁰。だがこのとき F 自体は水平方向に時間的延長をもつのだろうか、それとも F は全く延長をもたず、その全体が垂直方向に位置付けられるのだろうか。

こうした短い時間スケールを考える際に重要となってくるのが、B の「収縮」と呼ばれる記憶の形式である。この収縮と先の現実化という区別は、PP における「一次記憶」と「二次記憶」の区別とは異なることには注意が必要である。というのも、「一次記憶」が担う「残像」の形成も、「二次記憶」がかかわる過去の想起も、ベルクソンは現実化によって説明している (MM, 114, 157) からである。

では収縮とは具体的にはどのような働きなのだろうか。この点については、すでに別稿で詳細に論じたため¹¹、ここでは続く議論に必要な限りでその要点を取り出しておきたい。

収縮という記憶をめぐるベルクソンの記述を整理すると、(1) 多数の物質の振動から一

¹⁰ 実際、Čapek[1991] (p.17) は「私の現在」について、把持説的な解釈を採っているように思われるが、以下で述べる収縮概念を問題にしていないため、MM の時間意識論の延長説的な側面を捉えられていない。

¹¹ 本稿は元々、岡嶋[2016]と一緒に読まれるものとして書かれたものである。併せて参照されたい。

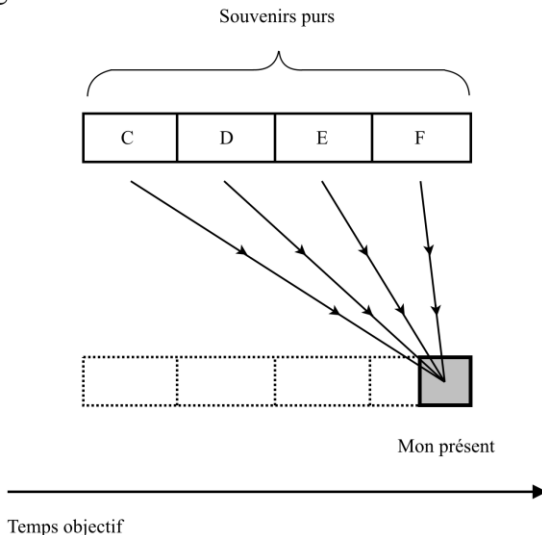
つの私の現在を構成する「綜合」(MM, 203)、(2) 物質的な感覚質からわれわれの知覚の感覚質を形成する「凝縮」(MM, 73)、そして (3) 物質的な振動が総体として有する莫大な持続を短縮する「縮約」(MM, 233) の三つの働きを区別することができる。

(1) によって構成される私の現在は、前後の瞬間と緊密な連続性を保っている。というのも、それらの現在を構成する多数の振動は、二つの現在に跨って存在するからである。さらに (2) から、この現在だけでは継起の経験は与えられないということが帰結する。私の現在の構成の素材となる物質の振動は、それ自体では相互に区別され継起的であるが、私たちはそれらを全て一緒に一様な（色や音などの）感覚質の下でしか経験できないからである。最後に、(3) の働きについて一定の解釈を採ることで、単一の私の現在が水平方向に 500 分の 1 秒相当の時間的延長を有する、と理解することが可能となる。

このような理解を前提として、先の問いに応じることにしよう。メロディーの経験の例 (fig. 2) において感覚経験と呼ばれていたもの (F) は、MM の観点からすると、延長説と把持説、いずれの側から理解すべきなのだろうか。収縮が構成する私の現在は、(ごく短いものではあるが) 水平方向に時間的延長を有する以上、継起の経験についてベルクソンが完全に把持説に与しているということとはできないだろう。しかしまた、日常的な時間スケールにおいて、F という一つの音の知覚経験が必要とする客観的な時間は 500 分の 1 秒より

りも長いため、その全内容が水平方向に表現されることはあり得ない。C-D-E-F の継起において、F の音の最後の 500 分の 1 秒が私の現在であるとき、これ以前の過去 (C、D、E の全体、そして F の最後の 500 分の 1 秒を除く部分) は、直接経験されるものではなく、(純粹記憶の現実化によって) 私の現在において表象されることで初めて経験されるからである (fig. 3¹²)。

fig. 3



¹² ここでは各音が 500 分の 1 秒の 2 倍であるかのように簡略化を行っているが、実際にはもちろん、各音の経験にはより長い（客観的な）時間がかかるのが普通である。また、現在と同時的な記憶 (F

こうした見解をとることによって、両説の困難は同時に解消される。一方で延長主義の難点は、時間的に離れた相互に識別可能な二つ以上の要素が、同程度の現在性をもって一緒に経験されると主張する点にあった。ベルクソンの立場においては、こうした問題は存在しない。というのも、そこでは、500分の1秒という同時閾値相当の時間的延長しか認められない以上、そもそも二つ以上の要素が識別可能な仕方では経験されることはないからである。他方、把持説の困難は、隣接する（見かけの）現在同士の間接の連続性が確保できないことであった。ベルクソンにとっては、こうした問題も生じない。というのも、私の現在においては、その構成要素である物質の振動そのものが重複することによって、緊密な連続性が保たれるからである。要するに、ベルクソンの時間意識論は、現在に同時閾値相当のごくわずかな時間的延長を認め、継起の経験については、過去の出来事の表象によって説明を与える、延長と把持、両説の利点を取りこみ、かつ困難を除去したハイブリッド説なのである。

3 時間の流れについて：継起の経験から経験の継起へ

現代の時間意識論における主要な二つの立場を参照軸として、MMにおける時間意識の構造を詳述してきた。これまでの分析が正しければ、MMは、記憶に二つの形式の区分を見出すことで、「継起の経験」に明確な構造を与えていたことになるだろう。だがベルクソンの読者であれば、こうした議論に対して、次のような疑問を抱くのではないだろうか。以上の分析は、なるほどたしかに過ぎ去った時間に対しては一定の妥当性を有しているかもしれない。しかし流れつつある時間、すなわち持続に対しては当てはまらないのではないか。これまで提示された図において、時間の流れはすべて、ある項から別の項への移行（ $C \rightarrow D$ 等）によって説明されている。「だがどうして進展（*progrès*）が事物（*choses*）と、運動が不動と一致するなどということがあるのだろうか」（MM, 211）、と。

この疑問に対応するためには、冒頭導入したPPにおける「継起の経験」と「経験の継起」の区別に立ち戻る必要がある。後者を認めただけでは、前者を説明したことにはならない、というのはジェイムズの言うとおりでだろう。だが同時に、「継起の経験」は「経験の継起」を前提としなければ成立しない、という点に注意すべきである。というのもまさしくこれが、「意識の流れ」についての、ジェイムズとベルクソンの対立点であるからだ。

の純粹記憶の内「私の現在」の真上にある部分）は通常現実化されないが、これが現実化されるとデジャヴが生じるというのが論文「現在の記憶と誤った再認」の主張である、と本稿は理解している。

引き続きメロディーの例を用いて説明しよう。C-Dにおいて、CやDといった経験の要素は、PPでは、「休息の場所 (resting-places)」ないし「実体的部分」(substantive parts)、その間の継起 (-) は「飛翔の場所 (places of flight)」ないし「推移的部分」(transitive parts) と呼ばれている (以上、PP, 243)。つまり、PPにおいて「経験の継起」とはこの実体的状態の継起のことであり、これを前提とした上で、「継起の経験」が問題とされていたことになる。一方のベルクソンは、後にこうしたジェイムズのを「私は、休息の場所そのものの内に、飛翔の場所を見出します——その見かけの不動性は、意識の不変的な眺めによって与えられるものなのです」(M, 580) と批判している¹³。これはつまり、「私の現在」は実体的部分ではなく、それ自体、推移的部分だということである¹⁴。すると、単一の現在そのものの内で推移ないし「移行 (transport)」(MM, 226) を説明する必要があるだろう。だがこれまでの議論だけでは、それは不可能である。というのも「私の現在」の時間的延長を形成する収縮の働きは、その延長の間つねに一定の感覚の質を形成することで、経験の継起を排除してしまうからである（「知覚は不動化 (immobiliser) を意味する」(MM, 233)）。したがって、単一の現在の推移の説明に（現実化と収縮のどちらであろうと）記憶を持ち出すことはできない¹⁵。とすれば推移の説明には、これらとは別の要素の導入が必要となるだろう。ベルクソンの時間意識論の核心部を引用しよう。

だから、私が「私の現在」と呼ぶ心理的状态は、同時に直接的過去の知覚でもあり、直接的未来の限定であるのでなくてはならない。ところで、直接的過去は、知覚される限りにおいて、後にみるように感覚である。というのも、あらゆる感覚は、要素的振動の非常に長い継起を翻訳するものであるからだ。また直接的未来は、自己を規定する限りにおいて、行動あるいは運動である。だから私の現在は、同時に感覚でもあり運動でもある。そして私の現在は、一つの不可分な全体を成すのだから、この運動はこの感覚に接続し、感覚を行動へと延長するはずである。そこから、私は、私の現在が、感覚と運動の結びついた体系から成ることを結論する。私の現在は、本質上、感覚＝運動的なのである。

¹³ ジェイムズ解釈としては異論があり得る (cf. Girel[2012], pp. 48-49)。

¹⁴ この理解は、おそらく、現代の時間意識論の観点からすると、異端的な立場だろう。先に概説を与えた延長説と把持説のいずれも、基本的には継起の経験だけを問題とし、時間の流れの意識を、実体的部分から実体的部分への移行として説明するものだからである。

¹⁵ 周知のとおり、Deleuze[1966] (pp. 48-57) は、「潜在的な共存」としての純粋記憶を現在の移行のための超越論的な条件と読むが、少なくとも MM における時間の流れについての記述からそうした解釈を取り出すことはできないように思われる。

これはつまり、私の現在が、私の身体についての意識にあるということである。私の身体は空間に拡がっていて、感覚を被り、それと同時に運動を実行する。[...] 私の身体は自分が影響を被る物質と、影響を及ぼす物質との間にあって、行動の中心、すなわち受けとった運動が巧みに道を選んで姿を変え、実行される運動となるための場所である。だからそれは、まさに私の生成の現在の瞬間、私の持続の中で形成途上にあるものを表現している。[...] われわれの現在は、われわれの存在の物質性〔＝質料性〕そのもの、すなわち感覚と運動の総体であって、他の何ものでもない。そしてこの総体は、持続の各瞬間に単一のものとして定まっている。その理由はまさに感覚と運動が空間の場所を占めるものであり、同じ場所に同時に複数のものが存在するわけにはいかないからだ（MM, 153-154）。

註釈しよう。MM 第一章によれば、ここで「感覚」は、身体の「現実的行動」を、また「運動」は身体の「可能的行動」を、それぞれ表現するものである（cf. MM, 58）¹⁶。すると、運動と感覚の「接続」とは、可能的行動と現実的行動の接続を意味し、この運動による感覚の「行動への延長」とは、「私の現在」において提示される複数の可能的な行動の内の一つが実行されることだと言えるだろう。このように、不動化された「感覚」に、「運動」が「接続」されることで、「私の現在」¹⁷は流れる。したがって、結局、MM の時間意識論における時間の「流れ（écoulement）」¹⁸とは、行動の実現（accomplissement）なのである。

時間の流れを行動の実現として理解することの最大の利点は、時間の「方向（direction）」（MM, 153）が、単一の「私の現在」において規定可能なことである。これまでの議論によれば、延長説も把持説も共に、「経験の継起」を時間軸に対して水平方向に隣接する二つの要素間の推移として捉えていた。MM の観点からすると、そうした試みにおいて単一の現在の内に、継起ないし流れを捉えることができないのは、感覚や運動が有する空間的延長が看過されているためである。しかしベルクソンは、両者を身体内部の別々の場所に位置づけることで、過去（現実の行動）から未来（未来の行動）へという時間の方向を明確に規定し、単一の現在において、「未来に食い込む過去の捉えがたい（insaisissable）な進展」

¹⁶ 知覚における可能的行動の反射という論点に関するベルクソンのターミノロジーについては、岡嶋[2015]（pp. 68-70）に整理しておいた。

¹⁷ つまり、これまで感覚だけから成るものとみなされてきた「私の現在」は、実際には感覚と運動の二つの要素から構成されている、ということである。

¹⁸ もちろんこれは、（ジェイムズ的な）継起の経験の意味での流れではなく、経験の継起それ自体の流れのことである。

(MM, 167)を理解することができる。「経験の継起」の説明のためには、時間軸に対して水平方向でも、垂直方向でもなく、空間的に共存する要素が並べられるはずの奥行きが必要なのだ。継起が経験されるには、ミニマムな時間的な延長が必要であるが、その時間的延長自体が継起するには、空間的延長が不可欠なのである。

これまでの議論をまとめると次のようになる。時間意識の延長説は、経験の連続性を確保できるがその前提に困難（二つ以上の要素の現在性かつ継起性）があり、把持説は逆に、前提に問題はない（同時的要素のみが統一される）が、現在同士の連続性を確保できない（第一節）。ベルクソンは、この困難を、記憶概念に特異な区分を設けることで解消している。すなわち、現実化によって継起の経験を説明し（把持説的な側面）、収縮によって連続性を確保する（延長説的な側面）（第二節）。後者の働きによって、感覚は不動化されてしまうが、これに運動が接続されることで、「私の現在」の「流れ」が説明可能となる（第三節）。

以上はMMを対象として人間的時間意識に限定した議論であったが、最後に、こうした解釈から帰結する、ベルクソンの時間論についての見通しを述べて結びとしたい。

『物質と記憶』は、人間から物質へ至るまでのあらゆる存在階層を「収縮」の「緊張の度合い」によって架橋する（cf. MM, 232）。このとき重要なのは、ベルクソンが「私の現在」を、物質の現在と対比していることである。人間的な現在の流れの本質を、行動（action）の実現にみる本稿の観点からすると、物質に意識があるなら、その現在の流れの本質もまた、その作用（action）の実行にあると考えることができるだろう。実際、ベルクソンは、「物質」を「空間に拡がる限りにおいて」「絶えず再開する現在」として定義し（MM, 153）、人間よりはるかに物質に近い層に位置づけられるアメーバについて、こう述べている。

異物がアメーバの突起に触れるとき、その突起は収縮する（se rétracte）。それゆえ原形質の塊の各部分は、みな同じように刺激を受け、またそれに対して反作用を行う。ここで知覚と運動は、ただひとつの特性において一致するのだ。それは収縮性（contractilité）である（MM, 55）。

物質（例えば、光の振動）の時空間のスケールがアメーバよりずっと小さいことを考えれば、物質における知覚や運動は、空間の一点に局所化されると言えるだろう。しかしそれは幾何学的な大きさをもたない点ではなく、ミニマムな拡がり（extension）をもった点で

ある。この空間的な広がりにおいて、物質の現実的作用（過去）と可能的作用（未来）が接続され、その作用が実行されることで、時間が流れる。つまり、ベルクソン哲学においては「時間一般」（MM, 231）の流れにとっても、空間的な広がりが不可欠なのである。

参考文献

ベルクソンからの引用には、通例の略号の後、現行版頁数を付記した（Mは*Mélanges*）。なおDIは筑摩学芸文庫の平井訳を、MMは田島訳、PPは今田訳（縮約版）をそれぞれ参照したが、必要に応じて適宜変更を加えてある。

Milič Čapek[1991]. *The new aspects of time: Its continuity and novelties: Selected papers in the philosophy of science*, Springer

Gilles Deleuze[1966], *Le bergsonisme*, PUF

Gilles Deleuze[1968], *Différence et répétition*, PUF

Barry Dainton[2000], *Stream of consciousness: Unity and Continuity in Conscious Experience*, Routledge

Barry Dainton[2014], “Temporal Consciousness”, in *Stanford Encyclopedia of Philosophy*

Barry Dainton[2015], “Neutral Monism, Temporal Experience and Time: Analytic Perspectives on Bergson”, International Workshop: The anatomy of Matter and Memory（バリー・デイントン著、岡嶋隆佑訳、「中立一元論、時間経験、時間——ベルクソンへの分析的視座」、『『物質と記憶』を解剖する（仮）』、書肆心水）

Mathias Girel[2011], “Un braconnage impossible: le courant de conscience de William James et la durée réelle de Bergson”, in *Bergson et James, cent ans après*, PUF

William James[1890], *The Principles of Psychology*, vol. 1, Henry Holt

Sébastien Miravète[2011], *La durée bergsonienne comme nombre et comme morale*, thèse de doctrat, Toulouse II

Sébastien Miravète[2012], “La durée bergsonienne comme nombre spécial”, in *Annales bergsoniennes V*, PUF

Robin Le Poidevin[2007], *The Images of Time: An Essay on Temporal Representation*, Oxford University Press

Frédéric Worms[1997], *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, PUF

伊佐敷隆弘[2010], 『時間様相の形而上学 現在・過去・未来とは何か』、勁草書房

岡嶋隆佑[2015], 「ベルクソンにおける知覚の諸相」、『哲学』、三田哲学会

岡嶋隆佑[2016], 「ベルクソンにおける収縮概念について」、『『物質と記憶』を解剖する（仮）』、書肆心水

杉山直樹[2006], 『ベルクソン 聴診する経験論』、創文社

平井靖史[2010]、「ベルクソンの時間存在論——直接想起説と濃縮説について——」、第28回ベルクソン哲学研究会

平井靖史[2016]、「現在の厚みとは何か？——ベルクソンの二重知覚システムと時間の流れ」、『『物質と記憶』を解剖する（仮）』、書肆心水

（おかじま・りゅうすけ 慶應義塾大学大学院文学研究科在学
／日本学術振興会特別研究員 DC）

本稿は、ドゥルーズ科研・脱構築研究会共同ワークショップ「ドゥルーズとデリダ」（2015年12月）での口頭発表の原稿を下に作成したものであり、また科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。